

第7回「自分の幸せだけでいいのか（一）」

利己主義と共同体と。

儒家思想と法家思想と。

講義 加地伸行

「論語指導士」養成講座 第7回講義

論語教育普及機構 代表 加地伸行

今回は「自分の幸せだけでいいのか」というテーマの第一回をお話しします。

人間は動物です。そこから自分の一生が始まります。これは間違いのない事実です。

動物である限り、自分を守ること、これは正しい。自分の命を守っていく、これは動物の本能ですから、誰も否定することはできません。

ですから、自分を守るということをとことん突き詰めていけば、これは利己主義ということになります。利己主義そのものは悪いわけでも何でもありません。動物の本能として自分を守る、自分の命を守る、これでいい。命を守るということは、何も外の敵から自分の身体を守ることだけではありません。静かな落ち着いた日々を無事に過ごす。これも己を守ることです。一生懸命働いて、収入を得て、生活をしていく。それでいいのです。

これは広い意味での利己主義です。人間が生きていくための最も基本的な態度と言えます。

世の中では、利己主義ではいかんと、頭から言う人がいますが、私はそうとは思いません。

まずは自分をしっかりと守る、これは基本です。まずは利己主義。

次からが問題です。

【動物の集団・人間の集団】

たとえば、動物の中には孤独な動物がおります。ネコ、キツネなどは単独行動です。

単独行動するときは、これはもう利己主義を徹底していけば問題はありません。

しかし、必ずしも単独行動で生きているものばかりではありません。集団で生きている動物が意外と多い。

集団で行動するとなると、そこには自然と集団のルールが生まれてきます。集団のルールがどういうものかにつきましては、動物を研究している学者達が様々に報告をしています。

ゾウのグループのルール、キリンのグループのルールといったことが伝えられています。しかし、全体としては非常に単純です。全体がどのようにして食べ物を求めるか、どこに安全な場所があるかと探したりする、大雑把なルールです。

ところが、人間は他の動物の集団と違い、非常に複雑な組織を作ってきました。

遠い昔ならば単純だったのですが、現代社会では、これはもう複雑な組織です。これをつぶすことはできません。そして複雑な組織のルールは当然単純ではありません。集団のルールは、個人の利己主義を超えることになります。

時には利己主義を否定することもあります。ここに、人間の苦しみと同時に、人間が生きていく上で得る大事なこと、その両方があります。

【人間の集団の始まり】

さて、人類の歴史の中で、集団がどのように始まったか。これは古今東西を問わず、ゾウやキリンなどという動物と同じく、血のつながったもの同士がグループを作っていました。

人間社会の場合には特に「共同体」ということばで表現しています。もちろん動物も共同体ですが、あまりにも集団の規則が単純ですから、単に集団ということばでしか言いません。

しかし我々は意識的に様々なルールを作ります。そこで「共同体」ということばを使います。

その共同体も、厳密には、血のつながりですから、「血縁共同体」といったほうがよりわかりやすいかと思います。この血縁による集団は、全世界でいろいろな形で存在しますが、この私たちが住む東北アジアでは、ある定まった言い方をします。

【血縁共同体】

中国ですと、それを「宗族」と言います。我が国、日本の場合は「宗族」という言い方はあまり致しません。我々は「一族」という言い方をします。韓国も「宗族」という言い方をするのではないのでしょうか。

沖縄の場合には「門中」という特別なことばを使っています。これも「一族」。要するに、血のつながったもの同士が集まることです。

今日の日本では、個人主義というヨーロッパの思想を導入しているものですから、この「一族」が徐々に解体して、少なくなってきております。ですから親戚が集まるといっても、そんなに数多く集まることはありません。三十人も集まれば、珍しいかと思えます。もちろん今日でも三十人、四十人集まる場所もあるでしょう。

中国では三十人どころではありません。この宗族の集まりを「宗族会」と称しますが、これは大変な人数が集まります。場合によっては、千人くらい集まる場所もあるでしょう。それほど多くの人のつながりがあるわけです。同じ一族と言っても、我々のイメージの一族とは相当に異なります。しかし、それが本筋だったのです。

【一族の変化】

むしろ、日本の一族の集まりが小さくなっていきました。日本も昔は、一族といえは多くの人々が集まりました。

そして、この血縁共同体「宗族」「一族」「門中」というのは、団結が固かったのです。

その有名な話が、例の^{もりおうがい}森鷗外の小説にある^{あべいちぞく}『阿部一族』という物語。これは熊本藩で実際に起こった事件です。阿部という家の一族が団結して、藩主の細川公と仲違いせざるを得なくなります。藩主はそれを許すことができませんから、阿部一族に対して討手を差し向けます。阿部一族はご本家に集まって、畳を裏返し、弓矢の防壁にし、守ります。女性や十歳以下の子は奥で自決。十歳以上の男子はすべて武器を持って討手を迎え、戦います。しかし、もちろん全員殺されます。

この阿部一族の物語が、「一族」というのは何であったかをよく表していると思います。

明治維新以降、(一族の)メンバーは次第に少なくなり、今日に至っています。

【一族のルール】

さて、この「一族」で生きていくとき、ルールが生まれます。

この共同体のルールとは何であるか。今日で言う法律ではありません。では、何を以て一族のルールとしたか。それはモラル、道徳です。

これが「一族」を結んでいました。決して法律的なものではなかった。ここが大事なところですよ。

我々が住む東北アジアにおいては、「血縁共同体」が生まれ、「血縁共同体」を仕切るものは、道徳、モラルであったということです。

これはヨーロッパと比べるとずいぶん違います。

ヨーロッパでは、次第に法律的なものが強くなっていきます。ですからヨーロッパの学問をしている人はこういいます。道徳と法律とは対立的な関係にある。そのように理解しています。

【道徳と法律】

道徳の場合、人を殺さないのは、良心が許さないから。

法律は違います。殺せば罰する。そこでブレーキをかける。

つまり、良心がしぼる道徳と、実質の刑罰でしぼる法律と、ルールは二つある。

道徳は強制することはできない。法律は強制することができる。道徳と法律との関係を詳しく論じているのは大体ヨーロッパ関係の方たちですね。

ところが、東北アジアの共同体は、全体を道徳で仕切ります。

しかしやはりルール違反をするとんでもない者が現れます。どうするか。

「法」(ほう・のり)によって処罰します。しかしその「法」は今日われわれが知っているような行政法であるとか、そのようなものではありません。それは100%刑罰です。刑罰を「法」と言っていました。

全体が道徳であって、その一部に「法」。

どうしてもやむを得ないときは「法」刑罰を使って、これを処断する。そういう形でした。

ですから、道徳と法は対立するものではなくて、「法」刑は、共同体のルールである「道徳」のごく一部でありました。ヨーロッパ的な対立関係とは全く違います。

共同体の単位がそれほど大きくない時代ならば、それでよかった。ご本家の言うことに皆従いました。しかし世の中が大きくなって、しかも外国の民族も集まるようになります。

大きな国、今日の国家というものが出来上がってくると、血縁者以外の者がたくさんいるという状態になります。様子は変わってきます。

そこで、それまでは共同体のルールである道徳のほんの一部であった「法」刑罰が前面に出てくるようになります。

血のつながっていない人たちと一緒に暮らしていくには、もう道徳だけでは抑えきれなく、仕切り切れなくなり、「法」刑罰を使うという決まり事になっていかざるを得なかった。

特に国家が大きくなるに従って、次第にそのような考え方になりました。

【儒家思想と法家思想】

そこで、儒教を推した儒家じゅかグループの思想、道徳が中心の儒家思想じゅかしそうから、「法」(ほう・のり)刑罰を大きな約束事にしようという者が現れてきます。そのグループを法家ほうかといいまして、法家思想ほうかしそうが前面に出てくるようになりました。

西暦前三～四世紀頃が一番盛んでした。

その中心人物の中に有名な思想家がおります。

韓非かんびと言います。書いているものが『韓非子かんびし』ですから、韓非子とも言います。

韓非子の考え方「法家思想」が、「儒家思想」の中から生まれ、これが、国家が大きくなるにつれ、重視されていく。そのような時代が変わっていきました。

当然、儒家思想と法家思想とは対立をしていくことになります。

孔子の時代、すでに、道徳性を主張する儒教グループと、まだまだ力が弱かったのですが、法律を大事にしていくグループとの対立が始まっています。

西暦前三世紀頃、孔子の次の時代になると、中国が始めて本格的な全国統一国家になります。

その全国統一を成し遂げたのが始皇帝^{しこうてい しん}。秦という王朝を建てた人です。

始皇帝は、自分の行う政治や在り方を法家思想に頼りました。そこで法家思想が全面的に中国に現れて、力を持つようになりました。



出典：国立国会図書館

これが、孔子の時代から、その後の西暦前三世紀あたりまでの動きです。

特にこの西暦前三世紀以後、中国は統一国家として、ずっと続きました。日本では明治の末頃まで同じ形が続きます。

中国の国家の中心は法家思想でした。

しかし国家というのは刑罰だけで持ちません。そこには文化があり、社会があり、人それぞれの考え方もあります。この法律だけでうまくいくわけがありません。

そこで、やはり大切なもの、「道徳」が再び力を持つようになります。

それは始皇帝以後の歴史において現れますので、またいつかお話しします。

今日は自分の幸せだけでいいのかというテーマの第一回でした。